

説教 『一つの石になる』 山本 護 牧師
聖書 ハバクク書 2:9~11/ルカによる福音書 19:37~40

紀元前6世紀、ユダ王国は周囲の大国に少しばかり抵抗しては服従し、やがてバビロニアの属国となる。預言者ハバククは、バビロニア王に朝見するユダの王たちを「お前は、自分の家に対して恥ずべきことを謀り、多くの民の滅びを招き、自分をも傷つけた(ハバクク 2:10)」と非難した。そんなユダ王の名はエレミヤが伝えている(エレミヤ 22:18,24)。米国にすり寄る傲岸な日本の首相もこれに似ている。

8月30日、安保法制に反対する膨大な数の国民が、国会周辺と全国各所に終結した。「まことに石は石垣から叫び、梁は建物からそれに答えている(ハバクク 2:11)」様相であった。石垣は啓示の御言葉だろうか、建物の梁は創造された民の応答であろうか。私たちキリスト者は、民の一人として「荒野の声(ルカ 3:4,8)」に応じるのか。それとも、預言者の一人として、石垣から神の真実を叫ぶのか。

ファリサイ人が「先生、お弟子たちを叱ってください(ルカ 19:39)」と求めると、イエスは「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす(19:40)」と答えた。群れに膨らんだ弟子集団は(19:37)、「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光(19:38)」と声高らかに神を讃美していた(19:37)。少々興奮気味でも、天の平和と神の栄光を讃えることに何の不都合があるのか。「先生」などとイエスを敬しても、彼らの分別は自らの保身のため、支配者の帝国におもねるものであった。元来ファリサイ人は民族派で異邦人を嫌っていたはずだが、力で勝る者には恭順になるらしい。半端な右翼首相とその取り巻きも、保身から沖縄を米国に差し出している。

「天には平和、いと高きところには栄光(19:38)」。天にある平和は、この地に未だ来ていない。一群の弟子による讃美は、人間の支配ではない神の支配を、この地平に招来する叫びなのであろうか。「弟子たちの群れはこぞって～喜んで(19:37)。かといって、気楽に喜んでいたわけではない。この喜びの讃美には異様な緊張が伴っている。想像を拡げると、武力や経済力という人間の支配から解き放たれた者の、目の輝きまで感じられる。国会周辺に集まった人々、全国各所で立ち上がった人々の目にも光があった。政治状況には幻滅させられるが、自ら立ち上がる者には希望の光が生ずる。

こんな現実には聖霊が働いておられる。「主の名によって来られる方、王(19:38)」とは誰か。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている(9:22)」キリストのことである。この救いの真実は、真実であるゆえに何をもっても抑え込むことはできない。力の圧迫でも、金の誘惑でも抑えられず、「石は叫びだす(19:40)」。

「俺は君たちに言う(よおく聞けよ)。もしこれらが黙っても石が叫ぶ(私訳)。「君たち」とはファリサイ人のこと。それでは、私たちはどこに在るのか。確実に、石の一つとして在る。「君たち」の位置で他人事のように讃美を聞くのではない。自分から声を上げて叫ぶ一つの石なのだ。キリストと一体になってその死と復活にあやかっている(マテ 6:5)石の叫び。これは、何びとにも抑えられない。石である私たちは、教会という石垣として叫び(ハバクク 2:11a)、創造された民はそれに呼応するだろう(2:11b)。



【おまけのひとこと】

“Like a Rolling Stone” 転がり続ける石には苔がつかない 永遠に青年であり続ける英語の警句
教会の石垣は苔むしている 個を超えた歳月 石は苔むして叫ぶ 過去と同程度に未来を見通し